

邦楽と古典教会音楽

音楽について素人の私などに音楽を語る資格はないが、何でも邦楽(声明も含めて)と西洋の教会音楽に共通する曲調が多くあるという興味ある話を私のキリシタン遺跡巡礼で最近知り合いになった声楽家 T 氏(テノール歌手)から聞いたので紹介したい。T 氏は神学校で神学を学ばれた方であるが、牧師にはならずイギリスに長期留学されて教会音楽を研究された音楽研究者でもあり、一方、キリシタン研究家の顔もお持ちである。

三味線(たとえば浄瑠璃や義大夫)、箏曲などに段物という曲がある。箏曲にはよく知られているものとして五段から九段まである。中でも広く知られているのが六段の調べである。これら段物の作曲者は八橋検校とされてきた。誰が聴いても純和風の名曲と昔から思われてきた。ところが六段など段物の旋律がグレゴリオ聖歌とよく似ていることに気付き検校作に異を唱えた方がおられる。その一人はヨーロッパの中世音楽史の研究で著名な皆川達夫氏である(箏曲六段とグレゴリオ聖歌クレド)。もう一人、大牟田市在住のカトリック信者であった箏曲家・故坪井光枝氏である。そこで T 氏は六段など段物とグレゴリオ聖歌との一致性を検証するべく詳細に調査されたのである。そうしてわかってきたことは、桃山時代、九州府内(大分市)にも滞在していた盲目のキリシタンで琵琶法師のロレンソ了斎にゆきあたった。ロレンソ了斎はキリシタン禁制以前府内で宣教師たちによって執行されていたミサの際に琵琶で聖歌の伴奏をしていたらしいことが浮かびあがってきた。彼は盲目だったため聖歌の旋律を記譜できなかったと思われる。当時府内に大友宗麟の招きで箏曲の師であった諸田賢順という僧侶がいた。彼は仏教歌の伴奏者でもあり、おそらく了斎とも接触があったと考えられ、その時了斎のミサ曲を箏曲用に採譜した可能性が高い。一方、徳川の世になってから江戸にいた八橋検校は九州に下り、諸田賢順の弟子であった玄恕から諸田流箏曲の教えを受けており、その時賢順の例の箏曲(了斎によるミサ曲の旋律)も受け継いだことは確実であろう。彼はさらに手を加えるなどしてそれらの旋律を箏曲の段物として完成させたと考えられる。T 氏の検証によって五段から九段まですべてグレゴリオ聖歌と対応することが判明し、T 氏はその成果を論文にして報告されたのである。

ここでグレゴリオ聖歌について簡単に説明すると、ローマカトリックのミサ(礼拝)で歌われる単声の典礼曲である。その歴史は古く旧約聖書時代から詩編に節をつけて歌われていたが、キリスト教がローマの国教になって以来、ミサのとき典礼の式文に節をつけて唱和されていた。これら典礼曲の整備に貢献したのが教皇・グレゴリウス一世(在位 590~604 年)である。プロテスタントでもおなじみのクレドやキリエ、グロリアなどがそうである。ローマカトリックでは典礼式文はラテン語であるが、プロテスタントではルターの宗教改革以後ラテン語による式文や聖歌を排し、ドイツ語の口語調に修正され、グレゴリオ聖歌もコラール

(Choral)と呼ばれるようになった。ここで T 氏の検証による箏曲の各段とグレゴリオ聖歌の対応を以下に紹介する。なお、江戸時代鹿児島から沖縄に伝えられた琉球箏曲の段物の方がよりグレゴリオ聖歌の旋律に近いと T 氏が指摘されている。

本土箏曲 ミサ曲

五段 ミサ通常文第二・聖母マリアの祝祭日より Sanctus

六段 信仰宣言・クレド Credo

七段 めでたし天の元后 アヴェ・レジナ Ave Regina caelorum

八段 ミサ通常文第二・聖母マリアの祝祭日より Agnus Dei

九段 ミサ通常文第二・聖母マリアの祝祭日より・グロリア Gloria

みだれ(山田流十二段) 主の祈り Pater Noster

上記の対比は T 氏が箏曲の楽譜を五線譜に書き換えての労作であるが、本当にこうだと確信するにはまだ少し検証が必要とのことであるが、氏がこれらの検証を思い立たれた切っ掛けについては次のように語っておられる。箏曲家坪井光枝氏が六段を弾いておられてクレド(ミサにおける通常式文のニケア信条に節をつけたもの)に酷似していることに気付かれてこれは八橋検校自身の作品ではないのではとの疑問をもち、調べるうちに箏曲の祖・諸田賢順に白羽の矢をたてたのである。そこで賢順について賢順の子孫である諸田素子氏および山崎拓治氏と三人で賢順の調査を開始された。それを伝え聞いて興味をもたれた T 氏が三人の方々や皆川氏らにも面談して話を聞かれ、かつ偶然にも道半ばでこの世を去られた坪井氏らが収集された沢山の資料を親族から託されたのがそもそもの動機だったそうです。秀吉、家康のキリシタン禁制によって日本からキリスト教が消え多くの資料が消滅した中で奇しくも当時のミサ曲が箏曲の形で伝承されてきたのはまさに奇跡といえよう。(八橋検校は賢順の演奏を直接聴いていた可能性もある)

京都三千院は声明で有名な寺であるが、中国伝来のこの声明の基本リズムである呂調、律調も実はシルクロードを経由してローマからもたらされたものと言われている。このリズムをうまく発声できない人のことから口下手のことを「呂律が回らない」という表現が生まれたのである。最近古典教会音楽と声明のコラボ演奏がフランスの教会で演奏されたりしてよく調和すると好評である。私もそれらの CD の一枚を持っているが、確かに違和感はない。私事で恐縮だが私は若い頃からのオーディオ趣味でアンプ類も手製の真空管で LP を聞いていた。私はバロックが好きで中でもバロックの 3 巨匠と呼ばれるテレマン、バッハ、ヘンデルらの宗教音楽を気に入っている。やはりレコードは真空管に限ると思う。CD は 5・1 サラウンドシステムの石のアンプで聴いているが、やはりアナログの LP と真空管の相性は別次元、音域が広く透明感があってしかも柔らかい音は何とも言えない。この機会にと久々にグレゴリオ聖歌を聴いて心安らぐ一時を得ました。

(註) ロレンソ了斎(1526-92) 諸田賢順(1534?-1623?) 玄恕(1606-49) 八橋検校(1614-88)